



Title	情報価付与と修正関係
Author(s)	東條, 良次
Citation	Osaka Literary Review. 1987, 26, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25516
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

情報価値付与と修正関係

東 條 良 次

1. 情報構造という概念は、これまで語順・文強勢を初めとして、分裂文・話題化のような有標構文を分析する手段としてもしばしば用いられてきた。が、それにもかかわらず、「新情報」「旧情報」を初めとする種々の用語の定義については、諸学者の間に必ずしも統一的な見解がなく、むしろ、明確な定義もなしに直観的な使い方がなされることのほうが多かったように思われる。したがって、情報構造の研究には標準となる枠組ともいえるべきものが存在しなかったといっているわけだが、この状況は Prince (1981) によって、かなり改善された。すなわち、この論文は分析にとって有効であると思われる概念を明確に定義し、かつ、それらの間に成立する関係を示したという点で、枠組となるべき理論の構築への第一歩と考えることができるのである。しかし、その一方で、未だ不十分な点をもいくつか含んでいるため、本稿では、まず彼女の議論を概観した後、そこに含まれている問題点を指摘、これに基づきながら代案を提出することを目的とする。

2. Prince は Chafe, Halliday, Kuno, Clark 等によって、これまでに提出されてきた旧情報の定義が次の三つに分類されるとする。(以下、この分類を便宜上 Prince の一次的分類と呼ぶことにする。)

- (1) a. 旧情報 p (predictability): ある特定の言語項目が文中の特定の位置に起こることが聴者にとって予測可能であると、話者が想定している。
- b. 旧情報 s (saliency): 発話を聞くと、聴者がある特定のもの・実体を意識していると、話者が想定している。
- c. 旧情報 k (shared knowledge): 聴者がある特定のものを知っているか、もしくは、それを推定することが可能であるが、他方、必

ずしもそのものについて考えているとは限らないと、話者が想定している。

(2) a. John called Mary a Republican and then SHE insulted HIM.

b. John called Mary a Republican and then she insulted him.

c. We got some beer out of the trunk. The beer was warm.

d. Where were your grandparents born?

(ただし, SHE, HIM は対照強勢を伴う。)

(2a) においては対照強勢ゆえに SHE, HIM は基準 p における新情報である。このため insulted は旧情報と解釈され, called a Republican を意味するとされる。対照強勢をもたない (2b) の場合, insulted の内容に関して (2a) のような含意を伴わない。また, (2c) の the beer は意識されているので s における旧情報, (2d) の your grandparents は聴者が知っているので k における旧情報ということになる。

ところで, こうして設定された旧情報の三つの基準 p, s, k は相互に全く独立の存在ではなく, その間にはある種の階層関係が存在する。すなわち, 基準 p における旧情報 (予測可能) は常に s においても旧情報 (意識されている) であるのに対し, s における旧情報は p において新である場合 (予測不可能) と旧である場合の二通りがあり得る (例えば, (2a) の SHE, HIM, (2b) の she, him は共に s では旧情報だが p では前者は新, 後者は旧)。また, 基準 s における旧情報 (意識されている) は常に k における旧情報 (知られている) であるが, 逆に k における旧情報は s においては新情報 (意識されていない), 旧情報どちらも可能である ((2c) の the beer, (2d) の your grandparents は共に聴者に知られているため k では旧だが, 前者は意識されており, 後者は普通意識されていないので, s ではそれぞれ旧情報と新情報である)。¹⁾ 以上のことから, 名詞句を情報構造上の地位に基づいて次のように分類することが可能になる (以下 Prince の二次的分類とする)。

(3) 想定既知性 (Assumed Familiarity)

- a. 最新 (Brand-new) …未知である。
- b. 未使用 (Unused) …知られてはいるが、聴者に意識されてはいない。
- c. 推定可能 (Inferable) …既に意識されている項目あるいは他の推定可能項目より推定することが可能である。
- d. 想起 (Evoked) …聴者に意識されている。

(4) a. I got on a bus yesterday and the driver was drunk.

b. Noam Chomsky went to Penn.

c. A guy I work with says he knows your sister.

(4) の下線部 a bus, the driver, Noam Chomsky, he はそれぞれ (3) の a, c, b, d にあたるわけであるが (ただし, c の he は a guy I work with と同一指示であるとした場合), 更に, Prince は (3) の a, b, c, d に対して, それぞれ BN, U, I, E の略号をあて, 実際の談話中の名詞句の情報構造上の地位の分析の結果を示すのに用いている。

3. 以上に示して来た Prince による二次にわたる分類によって, 情報構造に関する議論はかなり客観的な形で行い得るようになった訳だが, それでもやはり問題となる点は幾つかあって, まず第一に, 一次的分類の旧情報 p が二次の分類に反映されていないことが指摘できる。

(5) a. John bought toys for his sons, Jim, Tom and Harry, and he seems to have given a toy car to Tom.

b. No, he gave it to Harry.

(4a) の下線部 Tom と (4b) の Harry は, Prince の一次的分類の基準 p においてはそれぞれ旧情報と新情報であるが, 二次的分類ではこの違いは反映されない。両者は共に意識されているため「想起」に分類されることになる。第二に, 旧情報 s と k は名詞句のみと関連しているのに対し, p の場合はこれらと異なり, 例えば, (5b) の he gave it to は名詞句ではないどころか構成素をなしてすらいらないにもかかわらず, 基準 p においては旧情報

を担うものと考えられている。第三の問題点は、旧情報 *s* や *k* が、名詞句の指示する実体の、聴者にとっての心理的地位に基づいて決定されるのに、基準 *p* においては新旧情報の別は新情報を担う要素と旧情報を担う要素の間の相対的な関係によって決まるように思われることである。つまり (5b) の Harry が新情報かどうかは文の残りの部分 *he gave it to* との関連において決まるのであって、Harry が指示する実体の聴者にとっての心理的地位によって決まるのではない。

上で指摘した三つの問題点のうち、最初のものは残りの二つに由来すると考えてよい。すなわち、二次的分類に基準 *p* が反映されていないのは、その、他の二つの基準とは異質な性質の故なのである。

4. さて、上で指摘した問題点の解決に移る前に、まず、Prince による二次的分類をより明示的な形で示すため、(6) の情報価付与規則 (information-value assignment rule) を提案する。これは Prince が分類という形で示していたものの規則化であるが、名詞句の情報構造上の地位の判定が言語使用に際して無意識のうちにせよ行われている以上、我々は、これらの規則を実際何らかの形で知っているものと仮定できる。

- (6) 問題の名詞句によって言及されている実体が満足させる条件を、下の諸条件の中から選び、それに対応する情報価を名詞句に付与せよ。
- a. 実体は聴者に知られていないと、話者が想定している。→BN
 - b. 実体は聴者に、知られてはいるが、意識はされていないと、話者が想定している。→U
 - c. 実体は、既に聴者に意識されている実体あるいは他の推定可能な実体から推定され得ると、話者が想定している。→I
 - d. 実体は聴者に意識されていると、話者が想定している。→E

(6)における BN~E は、Prince の二次的分類において「最新」から「想起」までの各項に対して与えられていた略号を転用したもので、ここでは情報価 (information-value) を示す。また、情報価を付与される範疇として

の名詞句を特に E 表現 (entity expression, すなわち, 実体表現のこと) と呼ぶことにする。³⁾

次に基準 p の問題に戻ると, 先に見たとおり基準 p における新情報は, 「文の残りの部分」という概念と関連が深いように思われるので, ここで文全体に対しても情報価が付与されるものと考えてみる。この場合, 名詞句の実体に相当するものとして事件 (incident) を想定し, 情報価を付与される範疇としての文を I 表現 (incident expression, 事件表現) と呼ぶなら, E 表現と I 表現が情報価の付与範疇 (assignment category) ということになる。⁴⁾

(7) 問題の文によって言及されている事件が満足させる条件を, 下の諸条件の中から選び, それに対応する情報価を文に付与せよ。

- a. 事件は聴者に知られていないと, 話者が想定している。→ BN
- b. 事件は聴者に, 知られてはいるが, 意識はされていないと, 話者が想定している。→ U
- c. 事件は, 既に聴者に意識されている事件あるいは他の推定可能な事件から推定され得ると, 話者が想定している。→ I
- d. 事件は聴者に意識されていると, 話者が想定している。→ E

I 表現に関して, どのような情報価が設定し得るかは経験的に決められねばならない問題であるが, このことについては次節で考察することとし, ここでは I 表現についても E 表現と同様の情報価が有効なものとして論を進める。(6) と (7) により, (5) は次のように情報価が付与される。

(8) a. John bought toys for his sons, Jim, Tom and Harry, and

E1 (U) E2 (BN) E3 (U)

I1 (BN)

he seems to have given a toy car to Tom.

E4 (E) E5 (I) E6 (E)

I2 (BN)

b. No, he gave it to Harry.

E7 (E) E8 (E) E9 (E)

I3 (E)

情報価は統語的な諸範疇と異なって多くの場合、唯一的に決定することが難しいが、これは解釈に影響を与える総ての要素が分析者に必ずしも提示されていないからで、(8)に示された解釈は一つの可能性に過ぎない。ここでは先行する会話は存在しないことを前提とし、また(8b)の話者は John の家族を知っている一方、事件自体は知らないと、(8a)の発話者が想定しているものと仮定した。

(8b)において *he gave it to* が旧情報であるとする、これまでの直観に基づいた解釈は I3 に付与された情報価 E によって説明される。

次に Harry が新情報であることを説明するために修正関係 (modifying relationship) なる概念を導入する。

- (9) Kill an active, plump chicken. Prepare it for the oven, cut it into four pieces and roast it with thyme for 1 hour.

(9)において下線部の名詞句は総て同一の実体を指示しているが、その実体の状態もしくは特性は変化している。例えば、二番目の下線部にあたる it が指示するのは既に死んでいる chicken であって、an active, plump chicken ではない。同様のことが他の二つの it についても言えるのであって、名詞句が指示する実体は談話の中で次々と修正されて行くのである。この関係を E 表現に関する修正関係と考えるなら、同様に I 表現に関する修正関係も想定し得る。すなわち、(8)の I2 の Tom という要素は I3 において Harry に置き換えられ、I2・I3 は同一の事件を指示しているにもかかわらず、その構成要素の一部が修正されているのである。この関係を I 表現に関する修正関係と呼び、I3 の Harry を I3 の M 要素 (modifying element, 修正要素) と呼ぶことにする。この M 要素を指定するための規則が (10) に示す M 要素指定規則 (M-element designation rule) である。

- (10) ある I 表現を別の I 表現に修正している要素を後者の I 表現の M 要素として指定せよ。

(11) No, <u>he</u> <u>gave it</u> <u>to</u> <u>Harry</u> .
<u>E7 (E)</u> <u>E8 (E)</u> <u>E9 (E)</u>
<u>I3 (E)</u>
<u> </u>
<u> </u> M <u> </u>

(8a)は先に見た情報価付与に加え、(10)によるM要素指定を受けて(11)のようになる。基準pにおける新情報の「新しさ」は、新情報と解釈される要素自体が単独で保有する情報構造上の性質に基づくのではなくて、文全体との相対的な関係によるものであることが上の分析によって、明示的な形で示されることになる。Princeの旧情報pの概念は、最終的には、I表現の情報価(普通E)とM要素とに解体される訳である。

このような分析は、極めて限定された付与範疇に対し、統一的な形式を有する諸規則によって、これもまた統一的な性質をもつ情報価を付与しているという点において、例えば、次のような規則よりも優れていると言える。

(12) 実体に言及している名詞句の、文中における位置が聴者にとって予測可能であると、話者が想定している。→P

(12)のような規則が好ましくないのは、単に名詞句以外の要素も基準pにおいては新情報、あるいは旧情報と見なされるという事実を無視しているからというだけでなく、他の規則が言及していない「文中で名詞句が占める位置」に言及しているからでもある。同様に、名詞句中に含まれていない総ての語に情報価を付与するような(すなわち(8b)の he gave it to が旧情報と感じられることを説明するための)規則の可能性も排除されるが、これは、もしこのような規則が採用されるならば、名詞句の場合の実体に相当する指示物を明らかにもたないtoのような前置詞にまで情報価が付与されることになり、規則の統一性を損なうことになるからである。

もしも、情報構造を情報価によって表されるものと規定するならば、修正関係は情報構造の一部ではないということになる。しかし、(5b)のような文が示す問題は、伝統的に情報構造のそれとして扱われて来ているため、

ここでは、この伝統を尊重して、情報価によって示される情報構造を、狭い意味での情報構造 (information structure in the narrow sense), あるいは狭情報構造 (narrow information structure) と呼び、この狭情報構造に、I 表現に関する修正関係を加えたものを広義における情報構造 (information structure in the broad sense), あるいは広情報構造 (broad information structure) と呼ぶことにする。この関係を図示したものが (13) である。

- (13) 広情報構造 { 狭情報構造
 修正関係

この場合の修正関係には E 表現に関するそれは含まれないことに注意してもらいたい。言うまでもなく、E 表現に関する修正関係は、通常、情報構造の問題として考えられていないからである。

5. ところで、前節 (7) において I 表現に関する情報価付与規則を設定した際、I 表現に対しても E 表現と同じ情報価 (BN, U, I, E) が付与されると考えたが、実際にはこれは経験的に決定されなければならない問題である。しかし、結論から先に言うと、(7) に示したとおり、E 表現に対する情報価は I 表現に対しても有効なのであるが、BN, E に関しては既に見たので、ここでは U と I について考えてみよう。

- (14) a. Who discovered America? ⁵⁾

E1 (U)

I1 (U)

- b. Columbus did.

E2 (E)

I2 (E)

M

(14) の情報価は (14a) の話者が教師で (14b) の話者が生徒であるとの仮定の下に付与してある。疑問文は U を情報価として持つ典型的な I 表現であるが、これは普通、質問者は質問に際し、相手が問題となる事件を意識し

てはいないまでも少なくとも知ってはいるだろうと想定していると思われるためである。注意してもらいたいのは I2 の情報価が E である点で、これは生徒のほうでは、教師は質問の答えを知っているはずだと考えているのが普通だからである。したがって、もし、(14a) の発話者が生徒、(14b) の発話者が教師であるなら、生徒は質問の答えである Columbus を知っていても意識はしていないであろうし、あるいは知ってさえいないかも知れないので、その値は U か BN になるであろう。

(15) a. Did Columbus discover America or Newfoundland?

<u>E1 (U)</u>	<u>E2 (U)</u>	<u>E3 (U)</u>
<hr/>		
I1 (U)		

b. He discovered America.

<u>E4 (E)</u>	<u>E5 (E)</u>
<hr/>	
I2 (E)	
<hr/>	
M	

選択疑問文についても同様のことが言えるが、前もって M 要素のための選択肢が示されている点が wh 疑問文と異なっている。そのため E5 は状況にかかわりなく、常に E の値をもつことになる。

情報価 I も I 表現に関して有効であり、次の (16a) (17a) (18a) からそれぞれに対応する b の諸文が推定可能であると思われるが、その判定は極めて微妙で今後の研究に待たねばならない点が多い。

(16) 意味論的強制

- a. John is a king.
- b. John is a monarch.

(17) 経験的推定

- a. It began to rain.
- b. The ground began to get wet.

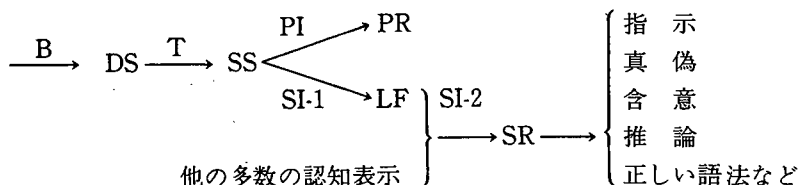
(18) 語用論的推定

- a. Two of my five children are in elementary school.

b. Three of my five children are not in elementary school.

6. 最後に、これまでの考察の結果を Chomsky 理論へ組み込むことの可能性について考えてみるならば、広情報構造の諸規則は (19) の SI-2 に属する可能性がある。

(19) 6)



B = 基底部規則 ; DS = 深層構造 ; PI = 音声解釈

T = 変形規則 ; PR = 音声表示 ; SS = 表層構造

SI = 意味解釈 ; LF = 論理形式 ; SR = 意味表示

ただ、この場合、その出力は SR の方へ行ってしまう、PR の方へは達しないことになる。文強勢決定のためには情報構造に関する情報は不可欠なので、これらの規則が適用されたあとで、その情報を PI が適用される前のところへ入力する方法も考えられるが、かなり場当たりの印象があるのは否めない。

第二の解決法は、情報価の付与ならびに M 要素指定を (20) (21) により SS の段階で行っておき、不適切なものは SI-2 のフィルターで排除するというものである。これならば、場当たりの規定を設けることなく、必要な情報を PR に送り込むことが可能である。

(20) それぞれの付与範疇に対して任意の情報価を付与せよ。(義務的)

(21) 任意の要素を M 要素と指定せよ。(随意的)

(22) 情報価フィルター

情報価をもつ表現が、その指示対象に関して次の条件に反する場合、それを含む構造を排除せよ。

- a. BN → 指示対象は聴者に知られていないと、話者が想定している。
(以下 U, I, E に関する条件省略)

(23) 修正関係フィルター

M要素指定を受けた要素が先行する I 表現を修正していないなら、その構造を排除せよ。

(20)～(23) は普遍文法に属すると思われるので義務的・随意的の区別も問題なく、Chomsky 理論にとってはこちらのほうが望ましいであろう。しかし、Chomsky 理論が演繹的立場に立つのに対し、(6)(7)(10)は帰納的立場から問題を見ているのであって、両者優劣の検討には更に慎重な考慮を要すると言えるだろう。

7. 本稿では Prince(1981)の議論を発展させ、これまで不明瞭であった旧情報 p の性質を情報価と修正関係という概念を用いることで説明しようと試みた。同時に、Prince が分類という形で示していた点を改め、規則というより明示的な形にすると共に、以上の考察の結果を Chomsky 理論に組み込む可能性についても示唆した。将来への展望としては、理論内部の問題(例えば、埋め込み文への情報価付与の可能性など)ならびに応用的問題(例えば、語順や文強勢と情報価・修正要素の間の関係など)の双方において検討すべき点は山積していると言えるだろう。

注

- 1) この関係を図示するなら次のようになるだろう。

旧情報 p		予測可能
旧情報 s		意識されている
旧情報 k		知られている
	新	旧

- 2) ここに上げた(3)の想定既知性の諸項のうち、最新・推定可能・想起の各項は、Prince(1981)では、それぞれさらに下位区分されており、例えば最新は無連結最新 (Brand-new Unanchored) ((4a) の a bus など) と連結最新

(Brand-new Anchored) (内部に含まれている別の名詞句によって他の実体に結び付けられている名詞句, (4c) の a guy I work with など) に分けられている。これらの下位区分は、情報価付与規則の設定に際して理論上好ましくない要素を含んでいる可能性があるため本稿第四節では無視した訳だが、(3) は Prince の分類について述べているのであるから本来はそのままの形で示すべきところである。が、本論にとっては余り重要でない問題なので敢えて省いた。

3) Yule (1981) の用語による。

4) Prince (1985) は話題化文と左方転移文の情報構造上の機能を研究し、文についても名詞句と類似の情報構造的機能があることを主張している。

5) who のような疑問詞に情報価を付与すべきか否かは未だ明らかではない。

6) 研究社『文法論』p. 243 による。

参 考 文 献

荒木一雄, 渡辺淳一, 天野政千代, 大島新, 飯田秀敏, 影山太郎 (1982) 『文法論』現代の英文法, 大修館。

Brown, G. and G. Yule. (1983), *Discourse Analysis*, Cambridge University Press.

Chafe, W. L. (1976), 'Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View,' in Li (ed.)

Cole, P. (ed.) (1981), *Radical Pragmatics*, Academic Press.

Halliday, M. A. K. (1967), 'Notes on Transitivity and Theme in English,' *Journal of Linguistics* 3. 2.

Li, C. N. (ed.) (1976), *Subject and Topic*, Academic Press.

成田義光 (1980) 「代用と省略」(『毛利可信教授退官記念論文集』)

Prince, E. (1981), 'Toward a Taxonomy of Given-New Information,' in Cole (ed.).

Prince, E. (1981), 'Fancy Syntax and "Shared Knowledge",' *Journal of Pragmatics* 9.

Yule, G. (1981), 'New, Current and Displaced Entity Reference,' *Lingua* 55.